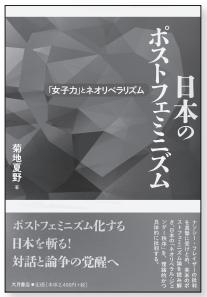
◆書　評◆



日本のポストフェミニズム

―「女子力」とネオリベラリズム―

菊地夏野 著
大月書店　2019 年

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　**佐野直子**

現在、フェミニズムは「第四波」にある、とも言われる。21 世紀初頭は「第三波」へのバックラッシュが激しかった時期で、「フェミニズムは終わったか？」などという雑誌特集が組まれたりしていた。しかし現在、フェミニズムに基づく運動は終わったどころか世界的な盛り上がりを見せている、ように思える。3 月 8 日の「国際女性デー」の時に欧州にいると、街角で行われているデモの規模と広がりに驚かされる。日本でも（ですら）、#Metoo 運動や #Kutoo 運動はかなりの注目を集めた。フェミニズムを専門とする雑誌が次々に創刊され、現代思想の 2020 年臨時増刊号『総特集 フェミニズムの現在』は、発刊直後に在庫切れになるほど注目された。ジェンダーの問題だけでなく、セクシャリティについての理解も 10 年前に比べればかなり進んできた感もある。

そのさなかで刊行された本書は、現在のフェミニズムの「隆盛」の高揚感ではなく、むしろ、「隆盛」の背景にある切迫感や危機感の方に共鳴して書かれている。まだ成し遂げられていないことが多すぎるのに、（今までの）フェミニズムが「終わった」ものとされ、むしろ足元から切り崩されつつ新たな潮流――ネオリベラリズムに取り込まれ、多様な声は細かく分断され周辺化されているのではないか。本書は、特に現代日本における「ネオリベラル・ジェンダー秩序」、すなわち「ポストフェニズム的な社会状況のもとで、旧来のジェンダー秩序を軸にしながら、ネオリベラリズムに適合的に再編されたジェンダー秩序（p.182）」を解きほぐすことを試みている。

それは決して簡単な作業ではない。ネオリベラリズムそれ自体のつかみにくさがまずその困難さの理由にあげられるため、本書では第 1 章でネオリベラリズムとジェンダー・セクシュアリティとの関連を整理している。その中で、特に「第二波」フェミニズムとネオリベラリズムの予想外の「共犯関係」が暴かれる。第 2 章では日本のネオリベラリズムが、ナショナリズムと結びつきつつ「男女共同参画」という形でジェンダー秩序を組み直していく様相を確認し、第 3 章ではさらに日本にも現れている「ポストフェミニズム」、すなわちネオリベラリズムの潮流の中で、フェミニズムがどう解釈されているかが示される。

現代の日本のジェンダー状況を考えるにあたって、考慮しなくてはならない問題系が多岐にわたって錯綜していることが示されるが、ポストフェミニズムの議論において改めて気づかされるのが、「フェミニズム」という概念それ自体が闘争のアリーナとなってしまっていることである。「フェミニズム」という概念は、そもそも 1872 年にフランスの作家アレクサンドル・デュマ（息子）が初めて使用した際には、かなり軽蔑的な含意があり、それを 1882 年にフランスの「フェ

ミニストのパイオニア」であるユーベルティヌ・オクレールが、自己執行カテゴリーとして再使用したという歴史がある（Chemin 2020）。「フェミニズム」「フェミニスト」が何を表象するのか、「ポスト」フェミニズムは、フェミニズムの何を「終了した」と見なしているのか、それに対して多様なフェミニストたちはどう答えるのか。第三波フェミニズムとポストフェミニズムや第二波、第四波フェミニズムとの関係はいかなるものなのか。あまりに多様でそれゆえに豊かなフェミニズムの運動と思想は、その広がりから把握することが困難になり、本書においても提示しきれているわけではないし、そもそもそんなことは不可能であろう。そして、その曲解や浅い理解に基づく批判ばかりが、フェミニズムを「わかりやすく」提示してくれるがゆえに流布することになる（本書 pp.79-82）。その結果、デモを行おうとする女性たちすら、「フェミニズム」という単語を表出することをためらい、忌避する結果となってしまっている（pp.140-141，pp.149-153）。

第 4 章から第 6 章までは、大学生へのアンケート調査や「女子デモ」、そして「慰安婦」言説分析などの事例編となる。前半の理論編を継承するにあたって、共通項として取り上げられるのが「女子（力）」という概念である。

「女子（力）」という概念に対して、実は評者はそれなりにポジティブな感覚を持っていた。「女子サッカー」など、スポーツにおける男女の区別の際において古くから用いられていたことからもわかるように、「女子」には、「属性」カテゴリーと見られがちな「女」「女性」という従来の概念、さらには特に「女」という単語に付される性的客体化の表象に抗して、ジェンダーとしての区別は積極的に引き受けつつも、セクシャリティ上の客体化を忌避し、抵抗するあり方を目指す自己執行カテゴリーとしての可能性があるからである。

さらに、「女子」が「力」と結びつくことで、従来「女らしさ」として「女性の心身に自然にそなわっているとみなされ」（本書 p.87）ていたものが、切り離され、細かく分解され、着脱可能で習得可能なものとして開かれ、「女子力男子」の誕生を可能にした（本書 p.123、加藤 2016）。「女子力」を求められるのが性別としての女性である必要などないし、その内実は女性性を超えた「人間性の向上」（本書 p.114）にまで拡大可能である。だとしたら、ジェンダー規範に基づく女性の抑圧への対抗的言説として使えるのではないか。

ただ、本書では、「女子」という概念にある揺れやあいまいさを指摘する一方で、「女性」「女」「少女」などの諸概念との区別を意識した概念の分析をしているわけではない。そのためか、第 4 章の大学生を対象とした「女子力」概念についてのアンケート調査結果の分析、とくに「意味が多岐にわたり、文脈によってさまざまに使われている（p.122）」様相と、大学生たちがこの概念に対して見せているある種のためらいについては、やや踏み込み不足な印象もあった。自由回答欄に現れる非常に多様な記述と、質問項目に対する「わからない」「どちらでもない」という回答の多さからは、「女子力」概念そのものが、「フェミニズム」と同様に、闘争のアリーナとなっていることが感じられる。2001 年にファッション誌で誕生した後に、2009 年にユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされたこの概念は、メディアの消費喚起のためのキーワードとして使用されるだけでなく、かなり揶揄的に使用されることも多い。他方でこの概念に（評者と同様に）ある種の解放を見た評論家も多かった（加藤 2016，pp.6-9）。第 4 章に掲載された調査が実施された 2013 年は、この概念が誰によってどのように使用されるのか、何を表象しうるのかを巡る闘争の真っ只中にあったのである。

それでもなお、「女子（力）」を日本のポストフェミニズム分析の中心軸にすえたことは重要であろう。本書において注目されているのは、「女子力」という概念を舞台にした闘争というより、「女子」の名のもとで補強されつつ組み直されるジェンダー秩序の内実の方である。女らしさ的なるものが「女子力」として個々に着脱可能・習得可能になったということは、つまり、女性性の断片化と商品化であり、努力して獲得したり、アピールしたり、購入したりできる何かになったことを意味する。そのような商品を一つ一つ購入し使用し見せびらかすことは、資本主義社会において、自らを「労働力」として商品化して売り出す際の付加価値として用いられることになるが、「女子力」という商品を購入するよう駆り立てられるターゲットには結局さまざまな不均衡（男女差のみならず、階層差や年齢差、地域差があり、さらにはケア労働に振り分けられる移民女性と「日本人」女性それぞれに異なる種類の「女子力」の発揮が求められる）がある。しかし、商品化によって、その不均衡の源にある抑圧構造が隠蔽され、自らの選択や欲望の問題とされてしまう。評者が「女子力」概念に見いだしていた解放感は、結局ネオリベラルな潮流のもとで既存のジェンダー秩序を軸にしつつ、新たなジェンダー秩序に回収されていってしまうことを、本書は警告している。評者がそこにアリーナと解放を見いだすことができたのは、「女子力」獲得圧力を笑い飛ばせるだけの特権的な位置にいたからにすぎない。

そして、「女子」が「女性性」から切り離されて商品化されていく過程で、セクシャリティ、そして「再生産」の問題が分断されてしまう。一つはっとしたのが、第 6 章の「慰安婦」問題の議論において引用文に現れた「愛国娘」（p. 170）と、「愛国女子」（p. 173）の違いであった。「愛国娘」は、戦争中の「慰安婦」として表象されるのに対して、「愛国女子」は、「慰安婦」の議論に反発して愛国的活動をしようとする女性たちを表象している。ここでの「女子」はジェンダーを強調しつつ、自らが性的客体化の対象となりうることを忌避する典型的な機能を果たしているが、「娘」はむしろその性的客体化をこそ強調することに成功しているように思える。家父長制（そしてそれを基盤とした家父長的天皇制）においては顛倒しつつも窮極的に性的な客体として、おぞましいほど的確に、「娘」が使用されるのではないか。ネオリベラルな言説が日本を覆い尽くしつつある一方、リベラル以前ですらあるような家父長制がまだ圧倒的な生々しさを持っており、しかもそこにある「保守的道徳主義的（p.4）」、かつナショナリスティックな言説は、ネオリベラルな言説と確かに違和感なく共存している。日本のフェミニズムの困難のゆえんであろう。

ただし、「娘」概念の使用は、「女子」同様、世代やジェンダー差によってかなり異なりそうである。現在「女子（力）」概念は、一時期のある種の流行語的な使用はおさまっている感があるが、今後いかなる形で使用される（されない）のか。特に大学生世代がどのように「女子」や「フェミニズム」という概念を使用し、変容させていくのか。筆者には今後も是非学生たちと調査研究を続けてほしい。

加藤千鶴, 2016,「『女子力』を指摘されるようになった男たち―男性に対して使用される『女子力』ディスコース調査―」『ことば研究年報』3 号，名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科佐野直子研究室，5-28.

Anne Chemin, 2020, “Le « féminisme », du vocabulaire médical au terme revendiqué”, *Le Monde,* 16 octobre 2020. https://www.lemonde.fr/idees/article/2020/10/16/le-feminisme-du-vocabulaire-medical-au-terme-revendique_6056206_3232.html